

Research Monograph Series

人間以前性と自己以前性

——生成の位相存在論における自己証明の存在論——

Pre-Humanity and Pre-Self: An Ontology of Self-Verification
in Generative Topological Ontology

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)

ORCID: <https://orcid.org/0009-0009-3796-5889>

Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics

Version: 1.0

Last Updated: July 23, 2026

Status: Ongoing Research

Research Monograph

Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)

Version 1.0 July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

Pre-Humanity and Pre-Self:

An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology.

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 23, 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本稿は、生成の位相存在論の立場から、自己がいかにして自己を証明し得るのかという問題を、「人間以前性」「自己以前性」「時間」「応答」「気づき」の概念によって再構成する試みである。哲学における自己証明は、しばしば「私は私である」という同一性命題へ回収される。この場合、自己は自己を前提として自己を証明するため、自己証明はトートロジーを免れない。他方、他者の承認、社会的評価、制度、肩書、資本、市場、記号、人工知能などを通して自己を確認しようとする場合、それは厳密には自己証明ではなく、自己以外による他者証明となる。

本稿は、この二者択一を超える第三の自己証明を提示する。その基本命題は、自己は自己自身によって直接証明されるのでも、他者の客観的評価によってのみ証明されるのでもなく、自己と自己以外との個別具体的なインタラクションが、時間を介して応答として帰還し、その応答への気づきが生起するとき、自己として現前する、というものである。

ここでいう「自己以外」は、人間的他者に限定されない。自然、動植物、物質、環境、作品、道具、場所、技術、人工知能、制度、資本、記号、時間、死など、自己ではないあらゆる存在を含む。これらは同一の存在様式を持つという意味で等価なのではない。自己と関係を形成し、それぞれ固有の指向性に基づいて応答し、自己生成の契機となり得るという点において、存在論的に等価なのである。

この構造を明らかにするため、本稿はまず「人間以前性」と「自己以前性」を区別する。人間以前性とは、人間という概念、人間的意味づけ、言語、制度および客観化に先立ちながら、現在もなお人間を生成し続けている自然の普遍性である。それは単に人類出現以前の過去を意味するのではなく、身体、呼吸、重力、季節、生長、枯死、物質、環境、時間などとして、現在の人間存在の内部と外部に働き続ける生成の基底を指す。

これに対して自己以前性とは、社会的・記号的に固定された自己に先行しながら、現在も自己を生成し続ける個別具体的普遍性である。それは自我が成立する以前の幼児期だけを意味せず、肩書、評価、所属、職業、市場価値、記号的自己像などへ自己が還元される以前から働く、固有の指向性、感覚、仕立て、判断および創造の可能性を指す。自己以前性は個人的特殊性ではない。それは、自己が自己であるための個別具体的な生成可能性が、あらゆる自己に開かれているという意味において普遍的である。

盆栽は、この二つの以前性の交差を示す主要な事例となる。樹木は季節、水、光、土、重力、病害、生長および枯死という自然の指向性に従って応答する。この応答は人間の意図へ完全には還元されない。その一方で、育て、剪定し、針金を掛け、植え替え、仕立てる行為には、実践者の個別具体的な指向性が現れる。盆栽は自然を一方的に支配する制作物でも、自然の自律性をそのまま保存する対象でもない。それは人間以前性と自己以前性が、時間を介して相互に応答するインターフェイスである。

このとき時間は、行為と結果を隔てる単なる経過ではない。現在の自己が自己以外へ差し出した行為は、その時点では完結しない。行為は季節や環境、物質的变化を経て、後の現在において自己以外からの応答として帰還する。したがって、過去となった自己の行為は、将来において自己以外の生成を受け、その将来が現在となったとき、当初の自己が予め所有していなかった現実として自己へ訪れる。この非線形的な時間構造において、自己は「自分の知らない自分」と出会う。

ただし、本稿における「知らない自分」は、予測不可能な未知の人格や、外部から新たに付与された自己を意味しない。気づきとは、自己に存在しなかったものを獲得することではなく、自己にすでに働いていたにもかかわらず、記号的世界のなかで忘却されていたものが現前する出来事である。そのため気づきは、単純な発見や喜びではなく、

「自分でありながら自分ではなかった」という絶望に近い経験を伴う。人間は、最も近くにあり続けた自己以前性を、他者の評価、社会的客観、制度、記号、資本および情報によって構成された自己像のために見失っていたことに直面するからである。

本稿は、この忘却の位相を「情報充満の位相」と呼ぶ。現代社会の問題は情報の不足ではなく、記号が記号を参照し、評価が評価を生成し、資本が資本を応答として返す閉鎖的な指向性が、自己証明の領域を独占していることにある。そこでは現象や応答が消滅したのではない。資本の位相では貨幣が、制度の位相では資格や肩書が、情報の位相では可視性や反応数が応答として返される。しかし、一つの指向性が過剰に優先されることによって、自然、身体、場所、物質、時間など、他の存在位相からの応答が忘却される。

したがって、位相変換とは単に視点を変更することではなく、自己が何を自己証明の応答として受け取るかという指向性と優先順位の変換である。人間が位相変換に対して不安、嫌悪、抵抗を示すのは、既存の自己証明の構造が不安定化するからである。心理学は、この位相変換に伴う主体の不安定さを問題とする。それに対して存在論は、その不安定化によって、いかなる存在位相が閉じ、いかなる存在位相が新たに開かれるのかを問題とする。

以上の議論から、本稿は気づきを、認識主体が対象について新しい知識を得る心理的作用としてではなく、時間を介した自己以外の応答によって、忘却されていた自己以前性が自己へ現前する存在論的出来事として定義する。自己矛盾は、論理的同一時点においては解消されない。「自己にあった」と「自己はそれを知らなかった」は、同時的命題としては矛盾する。しかし時間を導入すると、両者は異なる生成位相に属する。自己に潜在していた指向性は、自己以外との関係、時間的遅延、現実の応答を経ることによって、後の現在において初めて自己へ現前する。時間は矛盾を消去するのではなく、矛盾して見えた二つの自己を生成の異なる位相として開示する。

この意味で、本稿が提示する自己証明は論理的証明ではない。それは、自己と自己以外との関係が時間を介して還元不能な現実を生成し、その現実への気づきを通して自己が

自己として現前する、存在論的自己証明である。自己は完成された主体でも、他者の客観に映し出された像でもない。自己とは、人間以前性と自己以前性がインターフェイスにおいて交差し、時間的応答と気づきを通して反復的に生成する局所的な存在位相である。

本稿は最終的に、現代の空虚および虚無を、自己の内面の欠如としてではなく、記号的自己外部化が自己証明を独占し、人間以前性および自己以前性との時間的インタラクションが忘却された結果として理解する。そして芸術を、既成の自己像を表現する行為ではなく、人間以前性と自己以前性の交差を現実化し、忘却されていた自己が気づきとして現前する条件を設計するインターフェイスとして位置づける。

キーワード

生成の位相存在論；人間以前性；自己以前性；自己証明；気づき；自己外部化；インターフェイス；個別具体的普遍性；時間；応答；情報充満；盆栽

目次

Contents

第1章 序論.....	1
第2章 自己証明の哲学的問題	3
第3章 人間以前性	7
第4章 自己以前性	9
第5章 時間・応答・自己証明	13
第6章 気づき.....	19
第7章 インターフェイス存在論.....	24
結論.....	30
参考文献	33
方法論的声明.....	36

第1章 序論

1.1 問題設定

近代哲学は、「自己とは何か」という問いを中心に展開してきた。デカルト以来、自己は思考する主体として理解され、近代以降は理性、意識、自我、主体性などの概念によってその基礎づけが試みられてきた。一方、二十世紀以降の現象学、実存哲学、構造主義、ポスト構造主義は、この主体概念を批判的に再検討し、自己を他者、言語、歴史、身体、権力、制度などとの関係から捉え直してきた。

しかし、これらの理論に共通する問題が一つ存在する。それは、「自己はいかに自己を証明するのか」という問いが十分に解かれていないことである。

自己が自己を証明するならば、それは「私は私である」という同一性命題に帰着し、論理的にはトートロジーとなる。他方、他者の承認、社会的評価、制度、肩書、市場、資本、人工知能などによって自己を確認するならば、それは厳密には自己証明ではなく、自己以外による証明である。

この問題は現代社会において一層顕著になっている。情報技術の発達、自己を可視化し、数量化し、評価可能な対象へ変換した。しかし、その結果として自己証明は、評価指標や記号体系への依存を強め、自己そのものの現前はむしろ困難になっている。本稿は、この状態を「情報充満の位相」と呼ぶ。

本稿の目的は、この自己証明の問題を、生成の位相存在論の立場から再構成することである。

生成の位相存在論は、存在を固定的実体としてではなく、関係、位相、生成、インターフェイスおよび時間によって成立する局所的現象として理解する。本稿は、この立場を継承しながら、自己証明とは論理的な自己同一性ではなく、自己と自己以外とのインタラクションが時間を介して応答し、その応答への気づきを通して自己が現前する生成過程であることを論証する。

この議論のために、本稿は二つの新しい概念を導入する。

第一は「人間以前性 (Pre-Humanity)」である。

これは、人間という概念や制度に先立ち、現在もなお人間存在を生成し続けている自然の普遍性を意味する。

第二は「自己以前性 (Pre-Self)」である。

これは、社会的・記号的に固定された自己像に先立ち、現在もなお自己を生成し続けている個別具体的普遍性を意味する。

本稿は、この二つの以前性が、インターフェイスを介して時間的に交差するとき、「気づき」が生起し、その気づきこそが自己証明の存在論的基盤であることを示す。

したがって、本稿は自己を内面や意識に閉じた存在として理解しない。自己とは、人間

以前性と自己以前性が時間を介して応答し続ける局所的生成であり、芸術とは、その生成を可能にするインターフェイスの設計である。

本論文は、『生成の位相存在論の公理系——存在生成の基礎理論——』および『自己外部化の限界と存在生成——生成の位相存在論におけるインターフェイス存在論——』を継承し、それらに残されていた「自己はいかに自己へ現前するのか」という問題に対して、時間、応答、気づきという存在論的契機から理論的解答を与えることを目的とする。

第2章 自己証明の哲学的問題

——トートロジー・他者承認・規則の問題を超えて——

2.1 自己証明の哲学的困難

「自己とは何か」という問いは、西洋哲学の中心課題であり続けてきた。しかし、本稿が問題とするのは、それ以前の問いである。

自己はいかにして自己を証明し得るのか。

この問いに対して、哲学は大きく三つの方向から答えを与えてきた。

第一は、自己による自己証明である。

デカルト以来、自己は思考する主体として理解され、「我思う、ゆえに我あり」という命題は、近代哲学の出発点となった。

しかし、この命題は自己の存在を疑うことはできないことを示していても、自己を生成する構造を説明しているわけではない。

「私は私である。」

という命題は論理的には正しい。

しかし、それは自己を自己によって説明しているにすぎず、自己証明としては循環している。

すなわち、

自己証明は、

自己同一性へ還元される。

このとき自己証明はトートロジーとなる。

2.2 他者による自己証明

第二の方向は、

自己は他者との関係によって成立するという立場である。

近代以降、

主体は他者との相互承認、

社会制度、

言語、

文化、

歴史、

権力、

評価、

市場などとの関係から理解されるようになった。
これは主体を固定的実体から解放したという意味で重要である。
しかし、
自己証明という観点から見ると、
別の問題が生じる。
他者が自己を承認することは、
自己が自己を証明したことにはならない。
そこでは、
証明主体は自己ではなく、
他者である。
つまり、
自己証明は、
他者証明へ転化してしまう。
今日のSNS、
市場経済、
肩書、
資格、
ランキング、
アルゴリズム、
人工知能による評価などは、
この構造を極端な形で拡大している。
自己は、
自己そのものではなく、
自己像として流通する。
この状態において、
自己証明はますます困難になる。

2.3 規則と意味の限界

さらに二十世紀哲学では、
意味そのものの成立条件が問題となった。
規則に従うとは何か。
意味はどのように成立するのか。
この問題は、
規則や論理だけでは、
意味も自己も完全には基礎づけられないことを示している。

有限な過去の行為だけから、
未来の意味を完全に決定することはできない。
したがって、
論理は自己の継続性を保証できても、
自己生成そのものは説明できない。
規則は、
過去を保存する。
しかし、
自己は、
未来において生成する。

2.4 存在論への転回

以上から、
自己証明は、
論理でも、
承認でも、
規則でもない。
本稿は、
ここで問題の立て方そのものを変更する。
自己は、
自己によって証明されるのでも、
他者によって証明されるのでもない。
自己とは、
自己と自己以外との関係が、
時間を介して応答し、
その応答への気づきによって、
自己として現前する局所的生成なのである。
この立場では、
自己証明は論理学ではなく、
存在論の問題となる。
時間は、
論理の外部に付け加えられる要素ではない。
時間そのものが、
存在を生成する位相なのである。
したがって、

自己矛盾は、
論理によって解消されるのではない。
時間を介した生成のなかで、
異なる存在位相として現前する。
本稿は、
この時間的生成構造を、
「人間以前性」と「自己以前性」の概念によって理論化する。

第3章 人間以前性

——自然の普遍性としての存在生成——

3.1 人間以前性という概念

本稿は、「人間以前性 (Pre-Humanity)」を、人類史以前の時代区分としてではなく、人間という概念、人間的意味づけ、社会制度および言語体系に先立ちながら、現在もなお人間存在を生成し続けている存在論的基盤として定義する。

したがって、「以前」とは時間的な過去を意味しない。

それは現在も働き続ける生成の基底である。

近代以降、人間は世界を主体と客体、人間と自然、精神と物質といった二項対立によって理解してきた。しかし、人間以前性とは、このような区別が成立する以前から働いている生成そのものを指す。

重力は人間以前から存在し、人間の有無にかかわらず働き続ける。

季節は人間の歴史とは独立して巡る。

植物は人間の価値判断とは無関係に芽吹き、成長し、枯死する。

このような生成は、人間が世界に意味を与える以前から存在し、現在も人間を含めた世界全体を生成している。

したがって、人間以前性とは、「自然」という対象ではない。

それは、人間を含めた存在全体を成立させ続ける普遍的生成である。

3.2 自然は対象ではなく応答である

近代科学は自然を客観的对象として理解してきた。

自然は観察され、分析され、分類され、制御される対象として位置づけられた。

しかし本稿は、自然を対象としてではなく、自己以外として応答する存在と捉える。

自己が自然へ行為を差し出すとき、自然は自己の意図どおりにはならない。

それは自然固有の指向性によって応答する。

この応答は、人間の主観にも客観にも還元されない。

応答は、人間以前性が自己に現れる現象である。

この意味において、人間以前性とは、人間を超えた超越的存在ではなく、自己と自己以外とのインタラクションのなかで不断に現象する生成位相である。

3.3 盆栽における人間以前性

盆栽は、人間以前性を理解するための典型的実践である。
樹木は人間が設計したプログラムではない。
樹木には樹木固有の生成がある。
水を与える。
剪定する。
針金を掛ける。
植え替える。
しかし、その結果は人間が完全には決定できない。
樹木は、季節、気候、光、病害、土壌、生理作用など、人間以前性の位相に従って応答する。
したがって、盆栽とは自然を支配する技術ではない。
また、自然を放置する営みでもない。
それは、人間以前性が自己へ応答するインターフェイスである。
この応答は、現在には現れない。
季節を経て、時間を介して、後の現在において初めて現象する。
ここで重要なのは、応答とは結果ではないことである。
応答とは、人間以前性が自己へ生成を返す出来事である。

3.4 人間以前性と普遍性

本稿は、人間以前性を普遍性として理解する。
しかし、この普遍性は近代哲学における抽象的一般性ではない。
それは、生長、枯死、重力、季節、物質、時間など、それぞれが異なる現象を持ちながらも、人間による意味づけとは独立して生成を続けるという意味で普遍的なのである。
したがって、人間以前性とは、世界の背後にある超越的原理ではない。
それは、自己以前性が自己として現前するための存在論的条件である。
自己は、人間以前性から切り離されて自己となることはできない。
世界が応答するからこそ、自己は自己を現前させることができる。
この意味で、人間以前性とは、自己証明を可能にする最も根源的な普遍性なのである。

第4章 自己以前性

——個別具体的普遍性としての自己生成——

4.1 自己以前性という概念

前章では、人間以前性を、人間という概念に先立ちながら現在も存在を生成し続ける自然の普遍性として定義した。

本章では、それに対応する概念として「自己以前性 (Pre-Self)」を導入する。

自己以前性とは、自我が形成される以前の心理学的段階を意味するものではない。

また、幼児期への回帰や無垢な状態への復元を意味するものでもない。

本稿において「以前」とは時間的な過去ではなく、現在もなお生成を支え続ける存在論的基底を意味する。

したがって自己以前性とは、社会的・記号的に固定された自己像に先立ちながら、現在もなお自己を生成し続けている個別具体的普遍性である。

近代社会において自己は、

名前、

職業、

所属、

肩書、

評価、

市場価値、

資格、

国家、

思想、

さらには人工知能による数値化や可視化によって定義される。

しかし、それらはいずれも自己そのものではない。

それらは自己についての記号である。

自己以前性とは、そのような記号化された自己以前から働き続けている、自己固有の生成可能性である。

4.2 個別具体的普遍性

本稿は、自己以前性を「個別具体的普遍性」として理解する。

一般に普遍性とは、多くの個別から抽象された共通性として理解される。

しかし、そのような抽象的一般性では、人間以前性と自己以前性との関係は説明できな

い。
本稿がいう普遍性とは、
生成可能性の普遍性
である。
すべての自己は、
他者とは異なる自己以前性を持つ。
しかし、
その「自己固有の生成が存在する」という構造そのものは、
あらゆる自己に共通している。
この意味で、
個別具体性そのものが普遍性なのである。
したがって、
自己以前性は、
個人的特殊性ではない。
それは、
自己が自己であり得る可能性が、
すべての存在に開かれているという普遍性である。

4.3 自己以前性と創造

自己以前性は、
創造と不可分である。
創造とは、
新しい情報を追加することではない。
また、
未知の自己を獲得することでもない。
創造とは、
自己以前性が、
人間以前性とのインタラクションによって現実化する過程である。
例えば盆栽では、
同じ樹木を前にしても、
すべての人が同じ仕立てを行うわけではない。
樹木には、
樹木固有の生成がある。
しかし、
その生成と応答する自己の指向性は、

一人ひとり異なる。
この個別具体的な応答が、
作品となる。
したがって、
作品とは、
自己以前性そのものではない。
作品とは、
自己以前性が人間以前性との応答によって、
時間の中で現象した局所的生成である。

4.4 自己以前性と自己証明

ここで自己証明の意味が明らかになる。
自己証明とは、
自己が自己を論理的に証明することではない。
また、
他者の承認を得ることでもない。
自己以前性は、
自己自身によって直接知ることはできない。
なぜなら、
自己以前性とは、
自己が自己を超えて生成する可能性そのものだからである。
したがって、
自己以前性は、
人間以前性との時間的インタラクションを通してのみ現象する。
樹木は応答する。
季節は応答する。
場所は応答する。
他者は応答する。
芸術作品は応答する。
その応答を通して、
自己以前性は初めて自己へ現前する。
これが自己証明である。
自己証明とは、
自己が自己以前性に気づく存在論的出来事なのである。

4.5 忘却と自己以前性

しかし、
現代社会において、
自己以前性は容易に忘却される。
社会は、
評価、
肩書、
資本、
情報、
効率、
可視性などによって自己を規定する。
その結果、
自己は、
自己以前性ではなく、
記号化された自己像を自己そのものと誤認する。
この忘却は、
自己以前性が消滅したことを意味しない。
それは、
自己以前性が、
記号的応答によって覆い隠されたことを意味する。
したがって、
自己以前性は、
失われた自己ではない。
それは、
現在もなお生成し続けているにもかかわらず、
忘却されている自己なのである。
本稿は、
この忘却された自己以前性が、
人間以前性との時間的応答によって自己へ現前する出来事を、
次章で「気づき」として論じる。

第5章 時間・応答・自己証明

——生成としての時間構造——

5.1 時間は存在生成の位相である

これまでの章において、本稿は人間以前性を自然の普遍性として、自己以前性を個別具体的普遍性として定義した。

しかし、この二つだけでは自己証明は成立しない。

なぜなら、生成には時間が必要だからである。

近代哲学において時間は、多くの場合、存在が展開する背景として理解されてきた。

しかし本稿では、その理解を採らない。

時間は存在の外側に流れる尺度ではない。

時間そのものが存在生成の位相である。

自己は現在において行為する。

しかし、その行為は現在には完結しない。

行為は自己以外へ差し出され、

自己以外は自己固有の指向性に従って応答する。

この応答は時間を必要とする。

したがって、

時間とは、

自己と自己以外とのインタラクションが生成へ転化する位相なのである。

5.2 応答とは何か

応答とは、

結果ではない。

また、

原因に対する機械的反応でもない。

応答とは、

自己以外が、

自己とは異なる生成を経て、

自己へ返してくる現実である。

ここで重要なのは、

応答は、

自己の意図どおりにはならないことである。

もし、
自己の予測どおりであるなら、
そこには生成は存在しない。
しかし、
応答は偶然でもない。
応答は、
自己以外固有の指向性によって生成される。
自然には自然の指向性がある。
資本には資本の指向性がある。
制度には制度の指向性がある。
人工知能にも情報空間固有の指向性がある。
したがって、
応答とは、
それぞれの存在位相が、
自己へ返してくる存在論的現実なのである。

5.3 盆栽における時間

盆栽は、
この時間構造を最も明確に示す。
ある日、
一本の黒松を剪定する。
針金を掛ける。
植え替える。
しかし、
その瞬間には、
作品は存在しない。
一年後、
二年後、
五年後、
樹木は応答する。
枝が伸びる。
幹が太る。
葉性が変化する。
枯枝が生まれる。
新芽が現れる。

この応答は、
人間が作ったものではない。
また、
自然だけが作ったものでもない。
それは、
自己以前性と
人間以前性とが、
時間を介して共同生成した現実である。
したがって、
盆栽とは、
時間そのものを素材とするインターフェイスなのである。

5.4 自己証明の時間構造

ここで、
自己証明の構造が明らかになる。
現在の自己は、
自己以前性に従って行為する。
その行為は、
自己以外へ向かう。
自己以外は、
自己固有の生成を行う。
そして、
時間を経て、
応答が現在へ帰還する。
この応答に直面したとき、
自己は、
自己以前性へ気づく。
この構造は、
次のように整理できる。
現在
↓
自己の行為
↓
自己以外
↓

時間

↓

応答

↓

気づき

↓

自己証明

ここで重要なのは、
自己証明は現在には存在しないことである。
自己証明とは、
将来から現在へ訪れる現象なのである。

5.5 自己矛盾と時間

哲学において、
自己矛盾は、
論理の問題として扱われてきた。
しかし、
本稿は、
自己矛盾を、
時間の問題として理解する。
例えば、
自己は、
「そのような自己は知らなかった。」
と言う。
しかし同時に、
「それは最初から自己であった。」
とも言う。
論理的には、
この二つは矛盾する。
しかし、
時間を導入すると、
矛盾は消えない。
むしろ、
異なる生成位相として理解される。
自己以前性は、

最初から存在していた。
しかし、
自己へ現前してはいなかった。
時間を介した応答によって、
初めて自己へ現前する。
したがって、
自己矛盾とは、
論理的不整合ではない。
それは、
異なる時間位相が交差するときに現れる存在論的現象なのである。

5.6 時間と生成

本稿において、
時間とは、
過去から未来への直線ではない。
現在の自己が、
自己以外へ行為を差し出す。
その行為は、
将来において自己以外の生成を受ける。
その将来が現在となるとき、
自己は、
自己以前性へ気づく。
つまり、
未来は現在へ訪れる。
自己証明とは、
将来から現在への応答なのである。
この意味において、
時間は、
生成を媒介するものではない。
時間そのものが、
生成なのである。
したがって、
自己とは、
時間のなかに存在する主体ではない。

自己とは、
時間を介した応答によって不断に生成され続ける局所的存在位相なのである。

第6章 気づき

——忘却された自己以前性の現前——

6.1 気づきとは何か

本稿は、気づきを認識論的概念として理解しない。

一般に気づきとは、

新しい知識を獲得すること、

あるいは、

未知の情報を理解することとして理解される。

しかし、

本稿のいう気づきとは、

そのような認知作用ではない。

気づきとは、

忘却されていた自己以前性が、人間以前性との時間的インタラクションによって自己へ現前する存在論的出来事である。

したがって、

気づきとは、

何か新しいものを得ることではない。

むしろ、

最初から自己の生成に働いていたものが、

初めて自己へ現れる出来事なのである。

6.2 自分の知らない自分

本稿は、

「自分の知らない自分」

という経験を、

未知の人格の獲得として理解しない。

自己以前性は、

最初から存在していた。

しかし、

それは自己へ現前していなかった。

つまり、

知らなかったのである。

したがって、
気づきとは、
自己を変えることではない。
自己が、
自己以前性に出会うことである。
ここに、
本稿がいう自己証明が成立する。
自己は、
他者によって証明されるのではない。
また、
自己によって論理的に証明されるのでもない。
自己以前性が、
時間を介して自己へ現前するとき、
自己は初めて、
自己を自己として経験する。

6.3 忘却

この忘却は、
記憶喪失ではない。
存在論的忘却である。
近代社会は、
自己を、
肩書、
評価、
市場、
制度、
情報、
人工知能、
SNS、
資本などによって理解する。
これらは、
自己そのものではない。
それらは、
自己についての記号である。
しかし、

人間は、
記号化された自己像を、
自己そのものと思い込む。
ここに、
自己以前性の忘却が生じる。
この忘却とは、
自己以前性が失われることではない。
自己以前性が、
記号の応答によって覆い隠されることである。

6.4 情報充満の位相

本稿は、
この状態を
情報充満の位相
と呼ぶ。
情報が不足しているのではない。
情報が過剰なのである。
しかし、
問題は情報量ではない。
問題は、
一つの位相だけが、
自己証明を独占してしまうことである。
資本は、
貨幣によって応答する。
制度は、
資格によって応答する。
SNSは、
可視性によって応答する。
人工知能は、
情報によって応答する。
これらは、
すべて自己以外の応答である。
しかし、
その応答だけが、
自己証明の唯一の基準になったとき、

自然、
身体、
時間、
場所、
芸術、
季節、
死など、
他の存在位相からの応答は忘却される。
これが、
現代社会の空虚を生み出す存在論的構造である。

6.5 絶望としての気づき

本稿において、
気づきは、
必ずしも喜びではない。
むしろ、
ある種の絶望を伴う。
その理由は、
自己以前性は、
最初から存在していたからである。
人は、
自己を探していたのではない。
自己を見失っていたのである。
しかも、
最も近くに存在していた自己を、
最も遠くへ追いやっていた。
この事実へ直面するとき、
人は、
「自分でありながら自分ではなかった」
という逆説を経験する。
この逆説は、
論理では矛盾する。
しかし、
時間を導入すると、
それは異なる生成位相の交差として理解される。

したがって、
絶望とは、
自己否定ではない。
それは、
忘却されていた自己以前性が、
自己へ現前する存在論的契機なのである。

6.6 芸術と気づき

ここで、
芸術の存在論的位置が明らかになる。
芸術とは、
自己を表現するものではない。
芸術とは、
自己以前性が、
人間以前性とのインタラクションを通して、
自己へ現前する条件を設計するインターフェイスである。
作品そのものが芸術なのではない。
作品は、
気づきを生成する契機である。
したがって、
芸術とは、
美を制作する営みではない。
芸術とは、
忘却された自己以前性が、
時間を介した応答によって、
自己へ現前する条件を設計する存在論的实践なのである。
この意味において、
芸術は、
現代社会における自己証明の場であり、
情報充満の位相を越えて、
人間以前性と自己以前性とを再接続するインターフェイスなのである。

第7章 インターフェイス存在論

——人間以前性と自己以前性を接続する芸術——

7.1 インターフェイスの存在論的再定義

ここまで本稿は、人間以前性、自己以前性、時間、応答、気づきを通して、自己証明を存在論的出来事として定義してきた。

ここで残された問いは、
自己証明はいかなる条件のもとで生成されるのか。
ということである。

本稿は、その条件をインターフェイスと呼ぶ。

従来、インターフェイスとは、人間と機械、人間と情報、人間と他者を接続する媒介として理解されてきた。

しかし、本稿がいうインターフェイスは、そのような情報伝達装置ではない。

インターフェイスとは、
人間以前性と自己以前性が時間を介して交差する存在論的条件
である。

したがって、
インターフェイスは接続するだけではない。
それは新たな存在位相を生成する。

7.2 インターフェイスと現実

現実とは、
客観的事実ではない。

また、
主観的経験でもない。

現実とは、
自己と自己以外とのインタラクションが、
時間を介して応答した結果、
自己へ現前した生成である。

したがって、
インターフェイスとは、
現実を表示するものではない。
現実そのものを生成する条件である。

芸術作品も、
Web Installationも、
盆栽も、
建築も、
茶室も、
民宿狭山美学校も、
現実を表現しているのではない。
それらは、
新しい現実が生成される条件を設計しているのである。

7.3 Web Installation

本稿の立場から見ると、
Web Installationとは、
ウェブ空間に作品を置くことではない。
インターネットを利用することでもない。
Web Installationとは、
自己と自己以外との関係を、
情報空間と現実空間を横断しながら生成し続けるインターフェイスである。
ここでは、
ディスプレイは作品ではない。
サーバーも作品ではない。
QRコードも作品ではない。
作品とは、
それらを契機として、
人間以前性と自己以前性との新たなインタラクションが開始される出来事そのものである。
したがって、
Web Installationとは、
情報を伝達する技術ではなく、
自己証明を生成する存在論的装置なのである。

7.4 盆栽とインターフェイス

盆栽は、
自然を小さくしたものではない。
自然を模倣したものでもない。

盆栽とは、
時間を素材として、
人間以前性と自己以前性とを接続するインターフェイスである。
一本の樹木は、
季節に応答する。
しかし、
その応答は、
自己以前性との関係によって、
唯一の生成となる。
したがって、
盆栽作品とは、
完成された形ではない。
それは、
時間を介して自己証明が生成され続ける場である。
盆栽を見る者も、
育てる者も、
人間以前性との応答へ参加する。
その意味において、
盆栽は、
芸術作品である以前に、
存在生成のインターフェイスなのである。

7.5 人工知能と情報充満

人工知能もまた、
一つのインターフェイスである。
しかし、
人工知能そのものが問題なのではない。
問題は、
人工知能が返す情動的応答だけが、
自己証明の基準になることである。
人工知能は、
情報空間固有の指向性を持つ。
したがって、
人工知能は、
情報充満の位相をさらに加速させる可能性も、

逆に、
人間以前性と自己以前性への気づきを促進する可能性も持つ。
その違いは、
人工知能ではなく、
インターフェイス設計にある。
人工知能は、
人間以前性を代替することはできない。
しかし、
その接続条件を設計することは可能である。

7.6 分散型自律芸術 (DAA)

分散型自律芸術は、
作品の分散を意味しない。
また、
作者性の消失でもない。
本稿の立場からすれば、
DAAとは、
自己証明の条件を、
一人の作者から世界全体へ分散する芸術である。
芸術作品は、
完成品ではなく、
インターフェイスとなる。
鑑賞者は、
受動的受容者ではなく、
自己以前性を現前させる共同生成者となる。
したがって、
芸術は、
作者の自己表現から、
自己証明の生成へ転回する。

7.7 結論——芸術とは何か

本稿は、
芸術を、
美の制作として定義しない。
また、

自己表現としても定義しない。

芸術とは、

人間以前性と自己以前性が時間を介して交差し、忘却されていた自己が気づきとして現前する条件を設計するインターフェイスである。

この定義において、

芸術は、

作品という物体ではない。

芸術は、

人間が自己を自己として証明する存在論的条件である。

ここでいう自己証明とは、

自己が自己を論理的に証明することではない。

また、

他者の承認を得ることでもない。

自己証明とは、

自己が自己以外との時間的応答を通して、

忘却されていた自己以前性へ気づき、

自己として現前する生成そのものである。

したがって、

芸術とは、

自己を制作する行為ではなく、

自己が生成し続ける世界を設計する存在論的实践なのである。

この意味において、生成の位相存在論は、存在・自己・芸術を三つの独立した領域として扱わない。存在は生成として開かれ、自己はその生成の局所的な現前として成立し、芸術はその生成が起こる条件を設計するインターフェイスとなる。人間以前性は世界が自己へ応答する普遍的基盤であり、自己以前性はその応答に対して自己固有の生成を開く個別具体的普遍性である。そして両者が時間を介して交差するとき、「気づき」は認識ではなく存在の現前として生起する。本稿が「自己証明」と呼ぶのは、この時間的・生成的構造そのものである。

以上により、本論文は、『生成の位相存在論の公理系』が提示した存在生成の公理構造と、『自己外部化の限界と存在生成』が提示した自己生成のインターフェイス構造を継承しつつ、それらに残されていた「自己はいかに自己へ現前するのか」という問題に対して、「人間以前性」「自己以前性」「時間」「応答」「気づき」の五つの概念を通じて理論的回答を与えた。これにより、生成の位相存在論は、存在論・自己論・芸術論を一つの生成理論として統合する体系へと展開される。

結論

本稿は、「自己はいかに自己を証明し得るのか」という哲学の根本問題を、生成の位相存在論の立場から再構成した。

従来、この問題は二つの方向から論じられてきた。

第一は、自己を自己によって証明する立場である。しかし、「私は私である」という自己同一性は、自己を前提として自己を説明するため、論理的にはトートロジーを免れない。

第二は、自己を他者の承認、社会制度、市場、言語、権力、評価などによって理解する立場である。しかし、この場合に成立するのは、自己証明ではなく、自己以外による証明である。

本稿は、この二者択一を超える第三の自己証明を提示した。

その中心命題は、自己とは自己自身によっても、他者によっても証明されるものではなく、自己と自己以外とのインタラクションが時間を介して応答し、その応答への気づきを通して自己として現前する局所的生成である、ということである。

この理論を構成するために、本稿は「人間以前性」と「自己以前性」という二つの概念を導入した。

人間以前性とは、人間という概念や制度に先立ちながら、現在もなお世界を生成し続けている自然の普遍性である。

自己以前性とは、社会的・記号的自己像に先立ちながら、現在もなお自己を生成し続けている個別具体的普遍性である。

本稿は、この二つの普遍性が、インターフェイスを介して時間的に交差するとき、自己証明が成立することを示した。

ここで時間は、単なる経過ではない。

時間とは、自己と自己以外との関係が応答へ転化する生成位相である。

自己が現在において差し出した行為は、自己以外固有の生成を経て、後の現在において応答として帰還する。

その応答への気づきによって、忘却されていた自己以前性は初めて自己へ現前する。

したがって、本稿がいう気づきとは、未知の自己を獲得する認知作用ではない。

それは、人間以前性との時間的インタラクションを通して、忘却されていた自己以前性が自己へ現前する存在論的出来事である。

この立場から見ると、現代社会の空虚や虚無は、情報不足によって生じるのではない。

むしろ、評価、資本、制度、情報、人工知能など、一つの存在位相だけが自己証明を独占し、人間以前性との時間的応答が忘却されることによって生じる。

本稿は、この状態を「情報充満の位相」として位置づけた。

ここで芸術の存在論的位置も再定義される。

芸術は、完成した作品でも、作者の自己表現でもない。

芸術とは、人間以前性と自己以前性とが時間を介して交差し、忘却されていた自己が気づきとして現前する条件を設計するインターフェイスである。

作品とは、その生成を固定する物体ではなく、自己証明が開始される契機である。

この意味において、芸術は、美を制作する営みから、存在生成の条件を設計する営みへと転回する。

本論文の理論的位置

本論文は、『生成の位相存在論の公理系——存在生成の基礎理論——』および『自己外部化の限界と存在生成——生成の位相存在論におけるインターフェイス存在論——』を継承し、それらを補完する第三の基礎論文として位置づけられる。

第一論文では、存在生成の最小公理系が提示された。

第二論文では、その公理系から自己と自己外部化、インターフェイスの生成構造が導出された。

そして本論文では、その自己生成が、いかにして自己自身に現前し、自己証明となるのかという問題に対し、「人間以前性」「自己以前性」「時間」「応答」「気づき」の概念を導入することで理論的解答を与えた。

したがって、生成の位相存在論の理論体系は、次の生成系列として整理できる。

存在生成

→ 自己生成

→ 時間的応答

→ 気づき

→ 自己証明

→ 新たな存在生成

この系列は閉じた循環ではない。

自己証明によって現前した自己は、新たな自己以前性を形成し、再び人間以前性とのインタラクションへ開かれる。

存在生成は終点を持たず、生成そのものが新たな生成条件となる。

今後の展望

本稿によって提示された自己証明の存在論は、芸術論に限定されるものではない。

それは、人工知能、教育、建築、デザイン、身体論、日本文化論、盆栽、茶の湯、神仙思想、さらには社会制度の設計に至るまで、広範な応用可能性を持つ。

とりわけ、人工知能との関係では、人間とAIとの比較ではなく、人間以前性と情報空

間との関係を再構成することで、新たなインターフェイス設計の理論的基盤を提供し得る。

また、日本文化との関係では、盆栽、茶の湯、和歌、庭園などの実践を、自然との調和としてではなく、人間以前性と自己以前性との時間的応答を設計する存在論的インターフェイスとして再解釈する可能性を開く。

生成の位相存在論は、存在を固定された実体として理解するのではなく、生成し続ける関係として理解する。

本稿は、その理論体系において、自己がいかにして自己へ現前するのかを明らかにした。

そして、人間が自己を証明するとは、自己を論理的に確定することではなく、人間以前性との時間的応答を通して、忘却されていた自己以前性が繰り返し現前する生成そのものであることを示した。

この意味において、自己とは完成された存在ではない。

自己とは、世界との生成的關係のなかで絶えず現前し続ける、開かれた存在位相なのである。

参考文献

- Albarracin, M., Fields, C., Friston, K., Glazebrook, T., and others. 2022. Mapping Husserlian Phenomenology onto Active Inference. arXiv preprint.
- Benjamin, Walter. 1968. The Work of Art in the Age of Mechanical Reproduction. In *Illuminations*. New York: Schocken Books.
- Deleuze, Gilles. 1994. *Difference and Repetition*. Translated by Paul Patton. New York: Columbia University Press.
- Di Paolo, Ezequiel. 2016. “Gilbert Simondon and the Enactive Conception of Life and Mind.” In *Proceedings of the Artificial Life Conference*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Eco, Umberto. 1989. *The Open Work*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Friston, Karl. 2010. “The Free-Energy Principle: A Unified Brain Theory?” *Nature Reviews Neuroscience* 11 (2): 127–138.
- Heidegger, Martin. 1962. *Being and Time*. Translated by John Macquarrie and Edward Robinson. New York: Harper & Row.
- Levinas, Emmanuel. 1969. *Totality and Infinity: An Essay on Exteriority*. Pittsburgh: Duquesne University Press.
- Merleau-Ponty, Maurice. 1962. *Phenomenology of Perception*. London: Routledge.
- Merleau-Ponty, Maurice. 1968. *The Visible and the Invisible*. Evanston: Northwestern University Press.
- Nishida, Kitarō. 1990. *An Inquiry into the Good*. Translated by Masao Abe and Christopher Ives. New Haven: Yale University Press.
- Nishida, Kitarō. 1987. *Last Writings: Nothingness and the Religious Worldview*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Simondon, Gilbert. 2020. Individuation in Light of Notions of Form and Information. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Thompson, Evan. 2007. Mind in Life: Biology, Phenomenology, and the Sciences of Mind. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Varela, Francisco J., Evan Thompson, and Eleanor Rosch. 1991. The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience. Cambridge, MA: MIT Press.

Bourriaud, Nicolas. 2002. Relational Aesthetics. Dijon: Les Presses du Réel.

Primary Sources (Generative Topological Ontology Series)

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026a. Axioms of Generative Topological Ontology: Foundations of Existential Generation. Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026b. The Limits of Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 0.9.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026c. The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination. Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026d. Human Precedence and Self-Precedence: The Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 1.0.

Classical Japanese Sources

Dōgen. Shōbōgenzō.

Kūkai. The Ten Stages of the Development of Mind (Jūjūshinron).

Shinran. Tannishō.

Laozi. Dao De Jing.

References Closely Related to the Theoretical Framework

For this paper in particular, the following references form the closest philosophical foundation:

- Heidegger — the ontological structure of Being before subjectivity.
- Merleau-Ponty — embodiment and pre-reflective perception.
- Simondon — individuation prior to the constituted individual.
- Nishida Kitarō — pure experience and the logic of place.
- Varela & Thompson — enactive cognition and embodied emergence.
- Levinas — the constitutive role of alterity.
- Deleuze — difference, becoming, and ontological generation.
- Tanaka (2026a–d) — the foundational works establishing **Generative Topological Ontology, Interface Ontology, the Ontology of Self-Verification, and Language Derivatives** as an integrated theoretical framework.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。

本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。

本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。

研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。

本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。

本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。

本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。